

青蔵高原の高距性と民族分布

正井泰夫*

1 青蔵高原の高距性と面的スケール

青蔵高原（広義のチベット高原）の高さについては、その世界的スケールの故に、知名度がきわめて高い。同時に、その及ぶ範囲が日本の高原では想像もつかないほど広い。ここでは、その高距性と面的スケールについて考察したい。

青蔵高原の範囲は、通常、ごく大局的に把握されているに過ぎない。日本的スケールの精細さを地形学的に適用しようとしても、その境界設定はあまりにも不明確であり、きわめて小縮尺の地図の上でのとらえ方となりがちである。

大衆向けの書物などにも記載されているように、一般にはヒマラヤ山脈とクンルン（崑崙）山脈で南北を限られ、西はカラコルム・パミール、東は横断山脈の範囲とされている。もし、これが青蔵高原の範囲だとすると、東西2,500 km、南北1,000 kmの最大幅をもつ。しかし、北の境界をクンルン山脈でなく、アルティン山脈・祁連山脈までとすると、南北幅は少なくとも1,200 kmの最大幅となる。この広がり面積は約180万km²に達する。しかし、この180万km²のすべてが高原というわけではなく、高峻な山脈・山地、峡谷・盆地などが混在している。にもかかわらず、大局的にみて、ここが大高原地域

であることには変りない。

33ページに中国西部とその周辺の地形概観図を掲出した。この図の範囲には、シベリア南部からベンガル湾・インドシナ半島北部までが含まれているが、それは青蔵高原の地形条件を際立たせるためである。本図には3,000 mと4,000 mの等高線を概略的に記入したが、この青蔵高原が少なくとも海拔3,000 m以上、大部分が4,000 m前後、あるいはそれ以上であることを示す。

地球全体で、海拔3,000 m以上の地域をみると、太平洋上の島、南極大陸、アフリカ大陸、東南アジア、日本などにもあることが分るが、4,000 m以上に限ってみると、その分布範囲はさらに限定される。広域にわたって存在するのは青蔵高原一帯とアンデス高地のみであり、セントイライアス山脈などが、はるかに規模を小さくして続く。中でも、青蔵高原一帯の広さは大で、アンデス高地の3倍ほどに達する。因みに、アジア・ヨーロッパでは、青蔵高原一帯を除くと、カフカス・エルブールズ・アルプス・天山山脈に断片的にあるほか、ほんの局所的にアルタイ山脈、アララット山、キナバル山などの山頂部に見られるに過ぎない。それに対し、青蔵高原一帯では、その大半が4,000 mを越す高原状地形という形で存在している。つまり、青蔵高原の高距性は、その面積スケールにおいて圧倒的である。

[キーワード] 1 青蔵高原 2 チベット 3 チベット族 4 高距性 5 面的スケール

[keywords] 1 Qinghang Plateau 2 Tibet 3 Tibetans 4 altitudes 5 spatial scale

* 立正大学

II チベット族居住地域

チベット（蔵）族は、モンゴロイド系人種で、シナ・チベット語族のチベット語系の言語を話す人びとを指す。総人口は明確ではないが、約500万人とみてよい。うち400万人近くが中国領内に居住している。400万のうち約200万がチベット（西藏）自治区に、100万弱が青海省に住み、ほかに四川・甘粛省や新疆ウイグル自治区にも住む。中国外では、ネパール・インド・ブータンおよびカシミールに住む（第1図）。

青蔵高原に住むチベット族は400万近くに達するが、そのほとんどは海拔3,000m以上の土地に居住している。この地域で海拔4,000m以上のところに定住している人のほとんどすべてはチベット族といえる。漢族などチベット族以外の民族も青蔵高原に住むが、そのほとんどは4,000m以下のところに住む。しかも、公務員・軍人・警察官が多く、残りのほとんどは商人である。最近、砂金採取目的で入ってくる者も少ない。幹線道路沿いの宿泊施設・食堂の場合には、4,000mを越す高所でも、漢族などが生計をたてているが、その絶対数は多くない。

川喜田二郎の生態地理学的指摘にまつまでもなく、ヒマラヤ・チベット一帯では、高度差と民族分

布の上に高い相関がみられる。ヒマラヤ山脈では特に顕著な生態地理的な差異がみられ、低地のヒンドスタン平原からタライ地方にかけてのインドアリア系民族の居住、山間盆地のネワール族などの、いわゆるネパール人の居住、3,000m以上の高度の山地のチベット族、そして5,000m以上の高山・氷河地域における無居住という高度別分布が知られている。

青蔵高原に囲まれたツァイダム盆地は、その盆地床が海拔3,000m以下であるため、少くとも現状ではチベット族の居住はごく限られている。現在、その主要構成民族は漢族であるが、チベット族・回族のほか、カザフ・トルコ・モンゴル系の少数民族も見られる。青海湖周辺の海拔3,000mをやや越す高原でも同様で、農地のひろがったところ、および町の住民の主流は漢族である。タリム盆地まで下ると、海拔1,500m以下となり、チベット族の居住はきわめて少くなる。しかし、新疆ウイグル自治区に属していても、クンルン山脈より北側の青蔵高原上ではチベット族が主要構成民族となっている。このように、高度差と民族分布の間には明瞭な相関があり、従って集落景観・産業にも大きな地域差がみられる。

(1994年12月12日 受付)

(1994年12月24日 受理)

参考文献

- 梅掉忠夫他監修 (1990)：『世界大地図帖』平凡社。
川喜田二郎 (1982, 83)：『ネパールの人びと I, II』古今書院。
中国科学院地理研究所編 (1990)：『青蔵高原地図集』科学出版社。
長江源流航行踏査隊報告書編集部編 (1991)：『長江航行踏査報告書 I 沱沱河・通天河編1990』。長江全流域航行活動実行委員会。
中国地図出版社編 (1989)：『中国交通旅遊図冊』。
US Defense Mapping Agency Aerospace Center (1975)：『Tactical Pilotage Charts (50万分の1航空地勢図)』



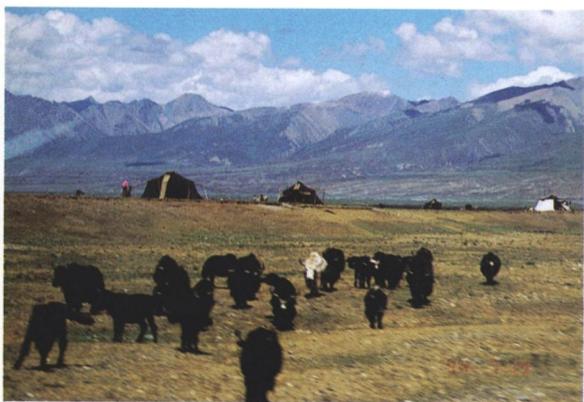
▲青海(チンハイ)湖南岸の菜花畑



▲柴達木(ツアイダム)盆地のオアシス



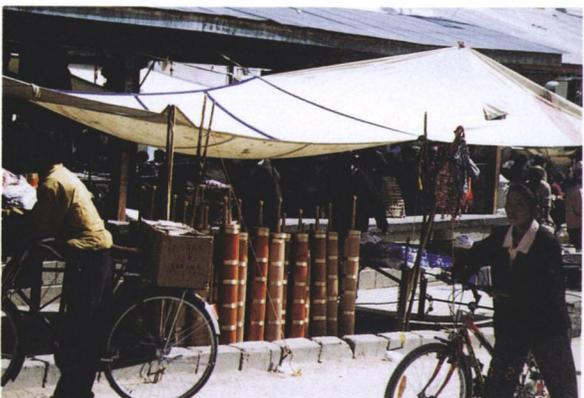
▲日月(イーユエ)山付近のチベット族集落



▲那曲(ナッチュ)付近のヤクの放牧



▲ヒツジの剪毛



▲日喀則(シガゼ)の自由市場



▲雅魯藏布江(ヤルンツァンポ)河畔の灌漑大麦畑



▲青蔵高原の青蔵公路(海拔約5,000 m)



▲那曲の子ベツ族



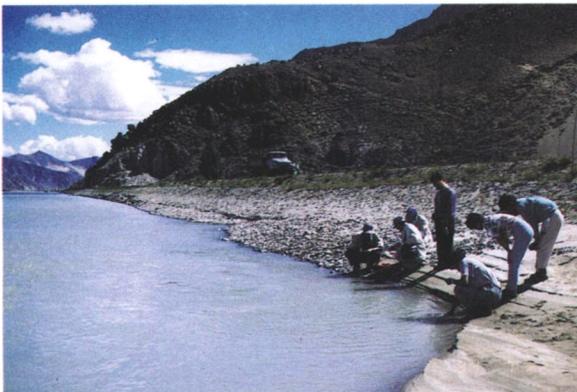
▲青蔵公路を歩くチベツ族



▲ラマ教総本山大昭寺



▲チベツ大学地理学教室



▲ラ薩(ラサ川)での水質調査



▲布達拉(ポタラ)宮